違いを認め合って、共に生きる社会を

北九州市人権啓発委員会長 柿崎 譲

「うちの野菜も形がばらばらで「規格外」も多いけど……でも、味はいだろ。人間もそれぞれ違うし、それぞれに味がある。それが個性ってやつで、総エちゃんは総エちゃん、それでいいんじゃない？」

「総エちゃんが自分はちょっと違うからって、誰かにいる人達も、きっと傷をしていると思う……」

雅志・裕子夫妻が不登校になっている少女総エに語りかけた言葉です。

「自分らしく生きるには、どうしたらいいのだろう？」常日頃思い悩む陽介の胸にも響いたことでしょう。

他者の違いを認めること、自分を大切にし自己を確立することが、人権を尊重する社会を作り上げる基礎であると言われます。

違いを認めない心が時として差別を生み出すものになることがあります。人一人一人が違って当たり前、みんなが違って面白いいのです。

それぞれの違いを互いに認め合い、自分以外の人々の痛みや苦しさ、考え方に共感し、自分の違いを受け入れてそれを尊重していくことが出来たら、共に生きる社会を作り上げることに繋がっていく。

「生れ持つ 君の個性が 宝物」

平成十五年の人権週間で北九州市が募集した標語の入選作品です。

自己確立のためには、人とは違う自分の個性を認め、それを十分に伸ばすことが重要です。

陽介は、このことにおかれています。人との交わりの中から、求めている答えを出しました。それゆえ、身の周りの差別されている人達の心の痛み・無念・怒りを共感し、差別なくそようと行動することでしっかりとつかんでいくのです。

陽介が顔に汗して耕した畑に、自ら摘いた種が芽を吹きます。やがて実を結ぶでしょう。希望に満ちた明日です。それは、陽介だけのものではなく、共に生きる社会の実現を願うみんなのものでもあるのです。

価格は税込（C#7364）

16ミリ版 278,250円
ビデオ版 84,000円

[上映時間41分]
《ポイント》
同和問題、男女共同参画、相互理解、個性の尊重、自尊感情等

制作のねらい

daremodakaeruijisobojoshibi, mirushite, anshinshiteimashirimukaimukenaihanaittaei, hitoyotobihonnojunkanjonosekureta, heidanzaiotobihonnojunkanjonosekuretarimasen.

「人権の尊重は大事なことである」ということは、だれもが分かっていることのように思われます。しかし、周りの人や自分の言動を振り返ってみると、どうでしょうか。自己中心的な考え方から、あるいは固定観念や他人の意見に左右されて、相手を認めようとしていないこともあるのではないかでしょうか。

この映画は、新しい命の誕生を控えた家族とその周りの人々のふれあいが藤を通して、「相手を理解すること」、「尊重し合うこと」、そして「自分の問題として行動すること」の大切さをすばらしい描いたものです。

この作品を通して、だれもが自分もしく幸せに生きていけるように、さまざまな人権問題を自分自身の問題として考えて、行動していただきたいと思います。

あらすじ

高校2年生の山吹陽介は、何ごともやる気にを持ちすぎて毎日を過ごしていた。当たり前のように大学受験を勤める両親、一雄と絢子にも反発を感じている。陽介が慕っているのは、いつも努力してくれている同居の祖父、寛一、郊外で農場を経営している叔父、雅志である。しかし、寛一と雅志は28年間も会っていない。寛一は一雄の反対を押し切って同和地区出身の裕子と結婚したからだ。

陽介は、時々、雅志の農場「山吹ファーム」で野菜作りの手伝いをしている。久しぶりにファームに行くと、カンボジアからの農業研修生フェイがいた。フェイは、陽介に「あなたの夢は何ですか？」と問うが、陽介は答えられなかった。そこで、大学生の恵美と中学生の雅志がやって来た。恵美は、不登校になっていて、裕子のメンタルフレンドで、その日は2人で植えたニンジンを探収穫に来たのだった。

陽介がファームから帰ると、裕子を抱えて帰ってきたときの誠、星野美美が、夫の良彦と言い合っていた。美美は出産後も仕事を見つけたいと言うが、良彦は、「おおふくろび、子育ては母親の仕事だからって…」と言い、態度が冷え切らない。夫婦の感情をみて、陽介は山吹ファームの収穫祭に誘う。

収穫祭は、多くの人に広がった。その中には、恵美や雅志もいた。雅志と裕子は、「みんな違って当たり前」と裕子が勇かしく語る。裕子を見ていた陽介と雅志は、雅志たちに、断絶している寛一との関係がこのままいいのかと迫る。その中で、突然、雅志が着ている。

美美は、このファームで生みたいと言う。一雄と絢子は、この日結婚式に出席していて、すぐには連絡が取れない。美美が診察を受けていた助産師は寛一の知り合いだったことを思い出して陽介に、何かがひらめいた。陽介は、家で留守番をしている寛一に電話をかけ、助産師を連れてきたとほしいと言う。寛一は、雅志とこのことを28年間ずっと思い悩んでいた。二年生を早送りで初めて美美的言葉に、あらわる寛一。いろんなことが頭の中をよぎる。そして、ついに決意した。